

8.18 [土]

読響サマーフェスティバル2018《三大交響曲》
東京芸術劇場コンサートホール／14時開演
YNSO Summer Festival 2018 “Three Greatest Symphonies”
Saturday, 18th August, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／大友直人 Conductor NAOTO OTOMO P.6

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

シューベルト 交響曲 第7番 ロ短調 D759 〈未完成〉 [約25分] P.12
SCHUBERT / Symphony No. 7 in B minor, D759 “Unfinished”

I. Allegro moderato
II. Andante con moto

ベートーヴェン 交響曲 第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉 [約31分] P.13
BEETHOVEN / Symphony No. 5 in C minor, op. 67

I. Allegro con brio
II. Andante con moto
III. Allegro – IV. Allegro

[休憩 Intermission]

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉 [約40分] P.14
DVORÁK / Symphony No. 9 in E minor, op. 95 “From the New World”

I. Adagio – Allegro molto
II. Largo
III. Molto vivace
IV. Allegro con fuoco

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[協賛] 大成建設株式会社
[事業提携] 東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

8.21 [火]

読響サマーフェスティバル2018《三大協奏曲》
東京芸術劇場コンサートホール／18時30分開演
YNSO Summer Festival 2018 “Three Greatest Concertos”
Tuesday, 21st August, 18:30 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／大井剛史 Conductor TAKESHI OOI P.7

ヴァイオリン／岡本誠司 Violin SEIJI OKAMOTO P.9

チェロ／ラウラ・ファン・デル・ヘイデン Cello LAURA VAN DER HEIJDEN P.9

ピアノ／反田恭平 Piano KYOHEI SORITA P.10

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64 [約26分] P.15
MENDELSSOHN / Violin Concerto in E minor, op. 64

I. Allegro molto appassionato – II. Andante –
III. Allegro non troppo – Allegro molto vivace

ドヴォルザーク チェロ協奏曲 ロ短調 作品104 [約40分] P.16
DVORÁK / Cello Concerto in B minor, op. 104

I. Allegro
II. Adagio ma non troppo
III. Allegro moderato

[休憩 Intermission]

チャイコフスキー ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23 [約32分] P.17
TCHAIKOVSKY / Piano Concerto No. 1 in B flat minor, op. 23

I. Allegro non troppo e molto maestoso – Allegro con spirito
II. Andantino semplice
III. Allegro con fuoco

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[協賛] 大成建設株式会社
[事業提携] 東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

8.25 [土]	第209回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No. 209 Saturday, 25th August, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
8.26 [日]	第209回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No. 209 Sunday, 26th August, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／ヨーン・ストルゴーズ Conductor JOHN STORCÅRDS P.8
 ヴァイオリン／シモーネ・ラムスマ Violin SIMONE LAMSMA P.10
 コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

シベリウス 交響詩〈フィンランディア〉 作品26 [約8分] P.18
 SIBELIUS / Finlandia, op. 26

シベリウス ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 作品47 [約31分] P.19
 SIBELIUS / Violin Concerto in D minor, op. 47
 I. Allegro moderato
 II. Adagio di molto
 III. Allegro, ma non tanto

[休憩 Intermission]

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉 [約40分] P.14
 DVORÁK / Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"
 I. Adagio - Allegro molto
 II. Largo
 III. Molto vivace
 IV. Allegro con fuoco

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
 [共催] 東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
 [助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
 独立行政法人日本芸術文化振興会



8.30 [木]	第614回 名曲シリーズ サントリーホール／19時開演 Popular Series, No. 614 Thursday, 30th August, 19:00 / Suntory Hall
9.1 [土]	第11回 パルテノン名曲シリーズ パルテノン多摩大ホール／15時開演 Parthenon Popular Series, No. 11 Saturday, 1st September, 15:00 / Parthenon Tama in Tama-center

指揮／ヨーン・ストルゴーズ Conductor JOHN STORCÅRDS P.8
 ピアノ／小山実稚恵 Piano MICHIE KOYAMA P.11
 コンサートマスター／景山昌太郎 (ゲスト) Guest Concertmaster SHOTARO KAGEYAMA

アレッサンドレスク 秋の黄昏時 [約10分] P.20
 ALESSANDRESCU / Autumn Twilight

ショパン ピアノ協奏曲 第1番 ホ短調 作品11 [約43分] P.21
 CHOPIN / Piano Concerto No. 1 in E minor, op. 11
 I. Allegro maestoso
 II. Romanze : Larghetto - III. Rondo : Vivace

[休憩 Intermission]

シベリウス 交響曲 第2番 ニ長調 作品43 [約43分] P.22
 SIBELIUS / Symphony No. 2 in D major, op. 43
 I. Allegretto
 II. Tempo andante, ma rubato
 III. Vivacissimo - IV. Finale : Allegro moderato

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団 (8/30)
 多摩市文化振興財団、読売日本交響楽団、読売新聞社 (9/1)
 [助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）(8/30)
 独立行政法人日本芸術文化振興会



大友直人

Naoto Otomo

熟達のタクトに期待
名匠の三大交響曲

交響曲の醍醐味を熟知した名匠が、三つの傑作の魅力を引き出す。《三大交響曲》をはじめ、読響とはたびたび共演を重ねており、息のあった演奏が期待できそうだ。円熟味を増すタクトに注目したい。



©Rowland Kirishima

1958年東京生まれ。桐朋学園大学卒業。指揮を小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明、岡部守弘各氏に師事。2004年から12年まで東京文化会館の初代音楽監督を務めた。現在、群馬響音楽監督、東京響名誉客演指揮者、京都市響桂冠指揮者、琉球響音楽監督を兼任。コロラド響、インディアナポリス響、ロイヤル・ストックホルム・フィルなど海外のオーケストラにも招かれ、01年フィルハーモニア管の日本ツアー、12年ハワイ響のオープニングコンサートを指揮、以降定期的に客演している。レパートリーは幅広く古典から現代音楽

に及び、数多くのCDをリリースしている。オペラの分野では、1988年日生劇場での〈魔弾の射手〉でデビューして以来、06年プッチーニ音楽祭にて三枝成彰〈Jr. バタフライ〉を指揮して注目を浴びたほか、11年黛敏郎〈古事記〉でも好評を博した。教育活動にも力を注ぎ、国際音楽セミナー「ミュージック・マスターズ・コース・ジャパン」を米国の指揮者アラン・ギルバートとともに開催するなど活発な活動を行っている。第8回渡邊暁雄音楽基金賞、第7回齋藤秀雄メモリアル基金賞受賞。

◇ 8月18日 読響サマーフェスティバル2018《三大交響曲》

大井剛史

Takeshi Ooi

次世代を担うホープ
マルチな才能に期待

オペラやバレエ、吹奏楽など幅広い分野でマルチな才能を発揮している次世代を担うマエストロ。読響と2度目の共演となる今回は、ヴァイオリン、チェロ、ピアノの若き3人のソリストを盛り上げる。



©K. Miura

1974年東京生まれ。東京芸術大学大学院修了。指揮を若杉弘、岩城宏之、クルト・マズア、ジェルメティらに学ぶ。2007年から09年までチェコ・フィルにて研修し、08年にアントニオ・ペドロッティ国際指揮者コンクールで第2位に入賞。これまでに仙台フィル副指揮者、ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉（現・千葉響）常任指揮者、山形響正指揮者を歴任。現在は東京佼成ウインドオーケストラ正指揮者を務める。東京都響、東京響、東京フィル、新日本フィル、東京シティ・フィル、群馬響、名古屋フィル、大阪フィル、広島響、九

州響など国内各地のオーケストラを指揮し、いずれも好評を博している。オペラの分野では、在学中より新国立劇場、東京二期会などのオペラ公演で副指揮者を務め、02年〈ペレアスとメリザンド〉を指揮してデビュー。以降、多くのオペラ作品を指揮するほか、ミュージカル、バレエなど幅広い分野で意欲的に活動している。

東京芸術大学音楽学部器楽科非常勤講師（吹奏楽）、尚美ミュージックカレッジ専門学校客員教授。

◇ 8月21日 読響サマーフェスティバル2018《三大協奏曲》

ヨーン・ ストルゴーズ

John Storgårds

初見参の名匠が指揮
故国が誇るシベリウス

故国フィンランドの音楽を、クリエイティブな才能で今に伝える名匠。各地で絶賛されている得意のシベリウスなどを渾身のタクトで披露する。

1963年ヘルシンキ生まれ。スウェーデン放送響でコンサートマスターとして活躍した後に、指揮者としてのキャリアを開始した。2008年から15年までヘルシンキ・フィルの首席指揮者を務め、現在はBBCフィルの首席客演指揮者、カナダのオタワ国立芸術センター管の首席客演指揮者などの任にある。これまでに、ベルリン放送響、シカゴ響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、ボストン響、フランス放送フィル、BBC響、バーミンガム市響、クリーヴランド管、バンベルク響などに客演。15年にはヘルシンキ・フィルとシベリウスの生誕150周年を記念したツアーを実施し好評を博した。オペラの分



©Marco Borggreve

野でも活躍し、昨年9月にはフィンランド国立歌劇場でファーゲルンド《秋のソナタ》の世界初演を手がけ、大きな話題を呼んだ。北欧の作曲家を中心にサーリアホ、コリリアーノら現代作品まで幅広いレパートリーを持つ。録音も多数行っており、グラモフォン賞、グラミー賞など権威ある賞を受賞、BBCフィルとのシベリウス全集も批評家から高く評価されている。読響初登場。

- ◇ 8月25日 土曜マチネシリーズ
- ◇ 8月26日 日曜マチネシリーズ
- ◇ 8月30日 名曲シリーズ
- ◇ 9月1日 パルテノン名曲シリーズ

A rist of the month

今月のアーティスト



©TAKUMI JUN

ヴァイオリン 岡本誠司

Violin Seiji Okamoto

日本人で初めてバッハ国際コンクール優勝を果たし、ヴェニツァフスキ国際コンクールでも第2位に輝いた若き実力派。1994年千葉県生まれ。東京芸術大学卒業後、ベルリンのハンス・アイスラー音楽大学で研鑽を積む。これまでに中澤きみ子、ジェラルド・プーレ、澤和樹、長原幸太、アンティエ・ヴァイトハースらに師事。新日本フィル、仙台フィル、オーケストラ・アンサンブル金沢など国内の楽団のほか、サンクトペテルブルク・フィルなどとも共演し、室内楽にも精力的に取り組んでいる。使用楽器は1831年製G.F. プレッセンダ。読響初登場。

- ◇ 8月21日 読響サマーフェスティバル2018《三大協奏曲》



©Sam Trench

チェロ ラウラ・ファン・デル・ヘイデン

Cello Laura van der Heijden

15歳でBBCヤング・ミュージシャン・コンクール優勝を飾ったチェロの新星。1997年イギリス生まれ。レオニード・ゴロホフらに師事。これまでにフィルハーモニア管、BBCフィル、イギリス室内管など英国一流の楽団と共演するほか、アンドリュー・デイヴィス指揮メルボルン響との共演でBBCプロムス・オーストラリアに登場。このほか、メクレンブルク=フォアポンメルン音楽祭、シュレスヴィヒ=ホルシュタイン音楽祭、BBCプロムスに招かれるなど活躍の場を広げている。今年4月には自身初のCDもリリース。読響初登場。

- ◇ 8月21日 読響サマーフェスティバル2018《三大協奏曲》



©andrea monacello

ピアノ 反田恭平

Piano Kyohei Sorita

メディアにも多数取り上げられ、幅広い分野で注目を浴びるカリスマ。1994年北海道生まれ。モスクワ音楽院を経て、現在はショパン音楽大学で学ぶ。第81回日本音楽コンクール優勝。2015年ロシア国際音楽祭でマリインスキー劇場デビューを果たす。これまでにN響、都響、日本フィルなど国内の主要楽団のほか、ワルシャワ・フィル、ロシア・ナショナル管、RAI国立響（イタリア・トリノ）とも共演。同年代の若手演奏家を集めた「MLMダブル・カルテット」を創設し、室内楽の分野でも積極的な活動を行っている。読響初登場。

◇ 8月21日 読響サマーフェスティバル2018《三大協奏曲》



©Otto van den Toorn

ヴァイオリン シモーネ・ラムスマ

Violin Simone Lamsma

オランダ生まれ。メニューイン音楽院と英国王立音楽院で学び、インディアナポリス国際コンクールなど多くのコンクールで入賞。これまでにマリナー、ヤノフスキ、ズヴェーデン、ルイーダらの指揮で、ロイヤル・コンサートヘボウ管、シカゴ響、フランクフルト放送響、フランス国立管などと共演するほか、ウィグモア・ホール、カーネギー・ホールなどでリサイタルを実施。チャレンジ・クラシックスからリリースされたCDも高い評価を得ている。使用楽器は1718年製のストラディヴァリウス「ムイナルスキ」。読響とは2度目の共演。

◇ 8月25日 土曜マチネシリーズ

◇ 8月26日 日曜マチネシリーズ



©Wataru Nishida

ピアノ 小山実稚恵

Piano Michie Koyama

チャイコフスキー、ショパンの二大コンクールに入賞した唯一の日本人。2006～17年の「12年間・24回リサイタルシリーズ」は、演奏内容と企画性が高く評価された。19年春からは3年間・6回の新シリーズ「ベートーヴェン、そして…」を開始予定。国内外主要オーケストラとの共演も数多い。東日本大震災以降、被災地で演奏を行い、自ら企画立案したプロジェクト「こどもの夢ひろば“ボレロ”」を毎年行う。CDはソニーから30枚リリース。著書に『点と魂と』。16年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞。17年度紫綬褒章受章。

◇ 8月30日 名曲シリーズ

◇ 9月1日 パルテノン名曲シリーズ

8.18 [土]

小室敬幸 (こむろ たかゆき)・作曲、音楽学

シューベルト 交響曲 第7番 口短調 D759 〈未完成〉

作曲：1822年／初演：1865年12月17日、ウィーン／演奏時間：約25分

交響曲は全4楽章が基本形。だから第2楽章までしか完成していない本作は「未完成」と見なされてきた。フランツ・シューベルト（1797～1828）が第3楽章途中で作曲をやめてしまった理由がはっきりしないため、様々な憶測を呼んでいるのだ。ところが、第2楽章までで「完成」だったのではないか？……という見解も、現在では珍しくない。例えば、気鋭のシューベルト研究者の堀朋平氏は、シューベルトの歌曲作品と関連付けながらこの交響曲を分析することで、両思いの相手がない「喪失」の第1楽章、そこからの救済である「再生」の第2楽章という完結した構成にあるのだと解説する。もう少し、分かりやすく噛み砕いてみよう。

第1楽章アレグロ・モデラートの冒

頭、有名な旋律が低音の弦楽器によって提示される。これがいわば「喪失」の象徴。その後続く、木管楽器が歌う暗い響きの第1主題からは、ひとりで恋に憂うシューベルトを想像してはどうだろう。弦楽器が主導して明るく始まる第2主題からは、実際に行動しながら一喜一憂する姿を連想してもいいかもしれない。ところが展開部と呼ばれる部分になると、この二つの旋律はあまり顔を出さず、「喪失」を象徴する旋律ばかりが登場していく。

第2楽章アンダンテ・コン・モートの冒頭、ホルンが優しく響くけれども、同時に前楽章の「喪失」も想起させる。自然を散策するような音楽のなかで、時間をかけて喪失と向き合い、時おり暗さがフラッシュバックしながらも「再生」へと歩んでいく。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ベートーヴェン 交響曲 第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉

作曲：1807年／初演：1808年12月22日、ウィーン／演奏時間：約31分

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）自身、本作の冒頭について「運命はこのように扉を叩く」と語ったとされるエピソードから〈運命〉という愛称で知られているが、現在この話はベートーヴェンの秘書による捏造という見解が一般的だ。どちらかといえば作曲のコンセプトは、もっとと抽象的なところにある。

ベートーヴェンは本作に先立つこと4年前、「交響曲というフォーマットをどこまで拡大可能か？」という挑戦をおこなって交響曲第3番〈英雄〉を書き上げた。この第3番は、ありとあらゆる食材を何でも投じて、斬新な料理を作ろうとしたような作品なのだが、食材が多いということは、それだけ要素ごとの対照は曖昧になってしまう。少ない素材をスティックに使い倒すことで、よりコントラストを明確にした音楽に仕上げたのが交響曲第5番なのだ。全4楽章の構成も、暗－明－暗－明という対照が際立つように並んでいる。

第1楽章アレグロ・コン・ブリオの冒頭に提示される八つの音（いわゆる「ジャジャジャジャー」×2）から、作

品全体を構成する細胞となる「リズム」や「音の動き」が抽出される。この細胞を少しずつ変化させながら、積み上げていくことで音楽を構築していく。

第2楽章アンダンテ・コン・モートは、前楽章の息の詰まる雰囲気から一転、息抜きの緩徐楽章となる。主に二つの旋律（一つ目は冒頭でヴィオラとチェロが、二つ目はクラリネットとファゴットが奏でる）が交互に登場。現れるたびに少しずつ姿を変えながら成長していく。

第3楽章アレグロは、テンポの速いスケルツォ。再び短調に転じるだけでなく、第1楽章冒頭を想起させる「高圧的なリズム」が繰り返される。明るく対照的な中間部を挟みつつ、最後は次の楽章へと光が差し込む展開へ。

その後、切れ目なく金管楽器の壮麗な響きと共に第4楽章アレグロへ突入。この楽章から甲高いピッコロと、重厚なトロンボーンが加わることで、より劇的な音楽に進化し、音楽が暗い方向に転じて物ともせず、あの「高圧的なリズム」に負けじと熱量の高さで前へ前へと突破していく。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉

作曲：1893年1月10日～5月24日／初演：1893年12月16日、ニューヨーク／演奏時間：約40分

チェコの作曲家による音楽といえば、スメタナ(1824～84)の〈モルダウ〉と、アントニン・ドヴォルザーク(1841～1904)による本作がとりわけ有名だ。しかし両者で、作曲上のスタンスは大きく異なっている。先輩格のスメタナは民謡や舞曲といった伝統音楽をなるべく引用せずに、チェコの精神を音楽で表現すべきと考えていたのに対し、ドヴォルザークはむしろ積極的に伝統音楽の旋律やリズムを取り入れたのだ。さらには室内楽や交響曲における緩徐楽章やスケルツォ楽章を、こうした民俗舞曲に置き換えることでドヴォルザークは独自の作風を確立し、評価を高めていった。

名声が広く世界に轟くようになっていた50代のはじめ、ドヴォルザークはニューヨークの音楽院の院長にならないかと打診を受け、アメリカへ引っ越すことに。そして当地で出会ったネイティブ・アメリカンの文化や、アフリカ系アメリカ人の音楽に魅せられたのだ。チェコの伝統音楽を取り入れるように、アメリカの文化を学んで作曲されたのが〈新世界から〉である。

第1楽章は、アダージョの序奏から

始まる。汽笛風の音や、まるで大波に揺られるような音楽はアメリカへと向かう船旅を思い起こさせるだろう。テンポの速いアレグロ・モルトに転じると主部になり、ホルンの勇ましい第1主題で幕が開く。他にも様々な主題が次々と登場。それらがリズム的に組み合わせられて劇的な展開部を構築する。

第2楽章ラルゴは「家路」というタイトルでも知られているが、本来はネイティブ・アメリカンを主人公とする叙事詩『ハイアワサの歌』にインスピレーションを受けて書かれた音楽だ。中間部は、雪の降り積もるなか主人公の妻を埋葬する場面になる。

第3楽章モルト・ヴィヴァーチェも『ハイアワサの歌』から生まれた音楽で、ネイティブ・アメリカンたちが徐々にテンポを上げながら、回転しつつ円状に踊る場面を描いている。

第4楽章アレグロ・コン・フォオーコは、金管楽器が吹き鳴らす第1主題とクラリネットが甘く奏でる第2主題を軸にしつつ、第1～3楽章に登場した旋律も再登場。全てが絡みあうことで圧倒的なクライマックスを築き上げる。

楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(トライアングル、シンバル)、弦五部

8.21 [火]

林 昌英 (はやし まさひで)・音楽ライター

メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

作曲：1844年／初演：1845年3月13日、ライプツィヒ／演奏時間：約26分

フェリックス・メンデルスゾーン(1809～47)の代表的な名作の一つ、ホ短調のヴァイオリン協奏曲。彼にはピアノ協奏曲など他の協奏作品も複数あるものの、「メンデルスゾーン 協奏曲」でインターネット検索すると、出てくるのはこのヴァイオリン協奏曲の情報ばかり。それほど別格に親しまれている人気作である。

本作の構想は作曲者20代の1838年から始まり、6年近い期間を経て作曲され、彼の短い生涯では晩年に近い時期の44年に完成した。初演は45年3月、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の演奏会で、ソリストは同団コンサートマスターのフェルディナント・ダーヴィト。メンデルスゾーン自身は病気のため参加できず、副指揮者が指揮を務めた。

本作は全ての楽章がアタッカ(切れ目なし)でつながるように指示がある。

これはその時期の協奏曲としては珍しい特徴であるが、当時は普通の習慣だった楽章間の拍手をメンデルスゾーンが嫌い、全曲を一つの作品として聴かせるための工夫だったと考えられる。

第1楽章 ソナタ形式の楽章。開始直後に独奏ヴァイオリンが哀愁漂う有名な第1主題を歌い始め、聴く人の心を一瞬で捉える。独奏ヴァイオリンのカデンツァが終結部の前ではなく、展開部の最後にあることも当時としては珍しい。

第2楽章 速度を落とし、独奏ヴァイオリンが明るくも哀調を帯びた旋律を歌い込む。陰りの濃い中間部を経て、最初の主題が戻り感動的に展開される。

第3楽章 独奏ヴァイオリンの感傷的な独白で開始、主部は明るいファンファーレに込めながら、軽快な主題を鮮やかに提示する。ヴァイオリンの技巧を満喫できる楽章で、オーケストラの華やかな響きと共に進行していく。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ドヴォルザーク チェロ協奏曲 変ロ短調 作品104

作曲：1894～95年／初演：1896年3月19日、ロンドン／演奏時間：約40分

ニューヨーク・ナショナル音楽院の院長として招かれたアントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）は、1892年アメリカに居を移し、母国チェコへの休暇帰国を挟んで約3年を過ごした。そのアメリカ時代に生まれた傑作の一つが、94～95年に作曲された変ロ短調のチェロ協奏曲である。同郷のチェリスト、ハヌシュ・ヴィーハンに捧げられたが、ヴィーハンがカデンツァの追加を要求したことで折り合いがつかず、96年ロンドンでの初演はイギリス人チェリストのレオ・スターンの独奏、ドヴォルザーク自身の指揮で行われた。

本作は「チェロ協奏曲」というジャンルを代表する傑作であり、屈指の人気演目でもある。ドヴォルザークは他にヴァイオリンとピアノに1曲ずつ協奏曲を作り、いずれも名品と言えるが、「ドヴォルザークの協奏曲」といえばやはり大抵はこのチェロ協奏曲を指すことになる。

なお、ブラームスが本作について「このようなチェロ協奏曲を書くことが可能だとわかっていれば、自分も試してみただろうに」と嘆息したエピソードはよく知られている。すでにチェロのための

名作をいくつも作っていたブラームスをして言わしめたこの言葉こそ、本作の価値を何より雄弁に伝えるものだろう。**第1楽章** ソナタ形式による雄大な楽章。冒頭クラリネットの仄暗い第1主題と、ホルンで歌われる伸びやかで美しい第2主題を中心に、独奏チェロの名技とオーケストラのシンフォニックな響きで、勇壮に展開されていく。

第2楽章 管楽器のソロと独奏チェロが繊細に絡み合い、郷愁を誘う緩徐楽章。短調の中間部では、独奏チェロに歌曲〈私をひとりにして〉作品82-1の旋律が現れる。かつて思いを寄せていた義姉が重病との報せを受けて、彼女が愛好した旋律を引用した。

第3楽章 チェコ舞曲風の勇ましい主題を中心とするロンド形式の楽章。二つの副主題を挟み、幾度も盛り上がりを築く。独奏チェロとコンサートマスターのヴァイオリン独奏が共演する名シーンを経て、穏やかな終結部に入る。完成前に他界した義姉を悼んで第1楽章の静かな回想と第2楽章の歌曲の断片が現れ、最後は力を取り戻して輝かしい終結を迎える。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、弦五部、独奏チェロ

チャイコフスキー ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23

作曲：1874～75年／初演：1875年10月25日、ボストン／演奏時間：約32分

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）は、三つのピアノ協奏曲をのこしている。ただ、単一楽章の第3番はほとんど演奏機会がなく、第2番はユニークな大作で近年演奏機会が増えているものの、第1番の人気には遠く及ばず、「チャイコフスキーのピアノ協奏曲」という場合は第1番のことと考えて差し支えないだろう。特に壮大な名旋律をもつ序奏は桁違いの知名度を誇っている。

モスクワ音楽院で教師をしていたチャイコフスキーが、ピアノ協奏曲の作曲に挑戦したのは30代半ば。かつて25歳の彼を教師に抜擢した恩師、ニコライ・ルビンシテインに初演の独奏を頼もうと考えていたが、試奏して意見を伺ったところ酷評を受けてしまった。それに憤ったチャイコフスキーは、ドイツの世界的音楽家ハンス・フォン・ビューローに初演を依頼。ビューローは1875年10月、アメリカの演奏旅行でピアノを担当して本作の初演を行い、成功を収めた。批判したルビンシテインはその後考えを改めて作曲者に謝罪し、各地で演奏して本作の知

名度を高めた。チャイコフスキーも後年には様々な助言を参考に改訂を行い、現在の聴きやすい名曲の姿になったのである。

第1楽章 劇的かつ雄大な序奏は、本作の顔とも言える名場面。しかし、この序奏の旋律はその後全く再現されない。主部は大規模なソナタ形式で、冒頭の細かく動き回る第1主題は、チャイコフスキーがよく滞在していたウクライナのカメンカで聴いた民謡が素材であるという。ピアノの技巧と表現が存分に発揮されていき、大きなカデンツァを挟み、壮大な盛り上がりを作って終わる。

第2楽章 フルートとピアノの穏やかな歌が幻想的な風景を浮かび上がらせる。中間部はテンポが上がり、シャンソンの引用による楽しい旋律が続く。

第3楽章 ソナタ風のロンド形式で、豪快な力強さとピアノの超絶技巧にあふれる楽章。舞曲的な第1主題と優美な第2主題を中心に進行して、最終盤のクライマックスではピアノの走句と全オーケストラの力強い第2主題が圧倒的な終結を演出する。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

8.25 [土]

8.26 [日]

柴田克彦 (しばた かつひこ)・音楽ライター

シベリウス
交響詩〈フィンランディア〉 作品26作曲：1899年（原曲）、1900年（交響詩）／
初演：1899年11月4日、ヘルシンキ（原曲） 1900年7月2日、ヘルシンキ（交響詩）／演奏時間：約8分

フィンランドの国民的作曲家ジャン・シベリウス（1865～1957）を代表する管弦楽曲。フィンランドは1809年以降ロシアの支配下にあり、99年に入ると、時のロシア皇帝ニコライ2世が議会の廃止や言論の圧迫によって属領化を推進した。そこで同国では愛国運動が盛り上がり、99年11月、その一環として新聞関係者による年金基金のための行事が開催された。行事では歴史劇『歴史的情景』の上演も企画され、付随音楽をシベリウスが担当。彼は序曲と六つの場面の音楽を作曲した。この『歴史的情景』の最終場面にあたる〈フィンランドの目覚め〉の音楽を改訂したのが、交響詩〈フィンランディア〉である。

本作は、1900年のパリ万国博覧会に参加するヘルシンキ・フィルの演目として企画され、同年7月、ヘルシンキにおけるパリ万博参加記念コンサートで

初演された。ただしパリでは、ロシアとの関係から愛国的なタイトルを使用できず、〈祖国〉に変更されている。そして本作は、国民の士気を大いに鼓舞し、独立運動の象徴的存在となった。さらに独立後の1938年、詩人ヴェイッコ・コスケンニエミが中間部の旋律に歌詞を付けて、〈フィンランディア賛歌〉と題した合唱曲に改編。これも支持を集め、第二の国歌的な音楽となった。

曲は、金管楽器を効果的に用いた迫力あるサウンドと迫真の展開を特徴としている。苦難を思わせる重い序奏に続いて、闘いを呼びかけるような力強い音型が登場。苦しみ立ち向かうがごとく進行し、勝利を呼び覚ます躍動的な旋律も加わる。中間部で〈フィンランディア賛歌〉となった旋律が美しく奏された後、激しさが戻って前半の音楽が再現され、高らかなクライマックスに至る。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、大太鼓、トライアングル）、弦五部

シベリウス
ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 作品47

作曲：1903年（1905年改訂）／初演：1904年2月8日、ヘルシンキ／演奏時間：約31分

シベリウスが残した唯一の協奏曲にして、20世紀の同ジャンル屈指の名作。唯一の協奏曲がヴァイオリン作品であるのは、彼が当初ヴァイオリニストを志し、高度な技術を会得していたことが大きく働いている。実際彼は、メンデルスゾーンの協奏曲等を演奏し、ウィーン留学中にはウィーン・フィルのオーディションも受けている（ただし不合格）が、極度のあがり症ゆえに演奏家への道を断念した。

本作は1903年に作曲され、翌年2月にヘルシンキで初演された。その初演は失敗に終わり、05年に大幅に改訂。改訂稿は、同年10月ベルリンにて、カレル・ハリールのソロ、リヒャルト・シュトラウス指揮／ベルリン・フィルによって初演された。シベリウスの音楽は、田舎の村ヤルヴェンパーへ引っ越した04年を境に、国民楽派的な作風から、透明感漂う簡潔な作風へと変化した。移住の前後にわたって書かれた本作は、両方の要素を併せ持つ作品となっている。

最大の特徴は、華美な名人芸を管弦楽が伴奏する形ではなく、交響曲風の造作の中でソロが弾かれていく点。と

はいえ、ソロは高度な技巧を要し、見せ場も少なくない。通常は終盤に位置する第1楽章のカデンツァが中間部に置かれ、それ自体が展開部を成している点、第1楽章がニ短調で開始されながら、第2楽章は変ロ長調、第3楽章はニ長調を基調としている点なども特徴的。そして全編に漂うフィンランドの森や湖を彷彿させる響きが、シベリウスならではの世界を醸し出す。

第1楽章 アレグロ・モデラート 様々な楽器が活躍する変化に富んだ音楽。冒頭でソロが奏する哀愁を帯びた第1主題に、チェロとファゴットで始まる第2主題、テンポを速めてオーケストラが奏する第3主題が続き、中間部のカデンツァを経て、激しく盛り上がる。

第2楽章 アダージョ・ディ・モルト 叙情的な緩徐楽章。木管楽器が神秘的に歌う旋律と、ソロが奏でる瞑想的な旋律を中心に運ばれ、中間に力強い場面も現れる。

第3楽章 アレグロ・マ・ノン・タント 民族舞曲風の二つの主題を中心にした、活気溢れるフィナーレ。ソロが縦横に駆け巡り、最後は圧倒的な高揚を遂げる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

8.30 [木]

9.1 [土]

柴辻純子 (しばつじ じゅんこ)・音楽評論家

アレッサンドレスク
秋の黄昏時

作曲：1910年／初演：不明／演奏時間：約10分

20世紀前半のルーマニアの作曲家という、ヴァイオリニストとしても著名なエネスコがよく知られているが、アルフレッド・アレッサンドレスク（1893～1959）も、作曲家、指揮者、ピアニストとして活躍し、ルーマニア音楽界の発展に大きく貢献した。

アレッサンドレスクは、ブカレスト音楽院を卒業後、パリのスコラ・カントゥルムでダンディに師事し、1918年、ブカレスト・フィルに指揮者としてデビューした。2回目のフランス留学はパリ音楽院で学び、帰国後はブカレスト・フィルやブカレスト放送響の専任指揮者を長らく務めた。その一方で、オペラ指揮者としても1921年から55年まで、ブカレストのルーマニア歌劇場で1500回以上の公演を指揮するなど、フランス・オペラのスペシャリストとして活躍した。さらにブカレスト音楽院教授として教育にも力を注ぎ、評論活動も精力的に続けた。作

曲家としては、オペラ、バレエ、オペレッタなど多数の劇場作品を中心に、管弦楽や室内楽作品なども手がけた。

しかしながら、今日ではアレッサンドレスクの作品が取り上げられる機会はそれほど多くはない。近年は、ルーマニア出身のソプラノ歌手アンジェラ・ゲオルギューが積極的に紹介していて、彼の歌曲は哀愁を帯びた美しい旋律が耳に残り、民謡風の節回しや独特のリズムをもつ。ルーマニアの民俗音楽の手法と西欧の音楽を融合させた作風は、彼の作品の特徴でもあった。

〈秋の黄昏時〉は、弦楽合奏のための単一楽章の作品で、ブカレスト音楽院を卒業する前年に作曲された。ドビュッシーの音楽から影響を受けた若き日の作曲家の意欲作。アンダンテ・カンタービレと記された音楽は、穏やかな流れのなかで様々な表情をみせ、叙情的で、どこか懐かしさを覚えるような心地よさがある。

楽器編成／弦五部

ショパン
ピアノ協奏曲 第1番 ホ短調 作品11

作曲：1830年／初演：1830年10月11日、ワルシャワ／演奏時間：約43分

フリデリック・ショパン（1810～49）の2曲のピアノ協奏曲（ホ短調とヘ短調）は、1830年に相次いで完成し、ホ短調の協奏曲は、同年10月11日に作曲者自身のピアノ独奏で初演された。ショパンはその直後、ワルシャワを離れる。ロシアからの独立を目指すポーランド国内は、蜂起前夜。緊張が高まっていたからだ。

ショパンはパリに移り住み、この協奏曲の楽譜は、1833年にパリの出版社から出版された。フランス、ドイツ、イギリスの出版社と契約を結び、それが当時、著作権侵害を防ぐ最良の方法とされていた。ただそれによって、複数の出版譜が存在することになり、自筆譜がほぼ現存しないため、この協奏曲の楽譜をめぐる問題は複雑だ。

本日は、ショパン研究の大家、ポーランドのヤン・エキエル（1913～2014）校訂の「ナショナル・エディション・コンサート・ヴァージョン」（2005年出版）が用いられる。エキエル版は、あらゆる資料を精査し、ショパンが楽器指定を書き込んだ一部現存するピアノ・スコアや、友人のフランショームがパート譜を元に作成したピアノ編曲版なども参考に

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

作られた。オーケストラ・パートの管楽器の本数や種類、強弱や発想記号等も異なる。例えば、第1楽章では、2本のフルートが同じ旋律ではなく、1本は響きを補強する旋律に変更され（36小節～）、ヴァイオリンの旋律がフルートに移し替えられ（第125小節～）、オーボエが新たに加わる（第373小節）など細かい変更も多い。その新鮮な響きは、楽曲の新たな可能性も示すことになるだろう。

第1楽章 アレグロ・マエストロソ、ホ短調 オーケストラによる堂々とした長い序奏に続いて、独奏ピアノの力強い第1主題とノクターン風の甘美な第2主題が現れる。二つの主題が、華やかに盛り上がり、最後は決然と結ばれる。

第2楽章 ロマンソ：ラルゲット、ホ長調 弦楽器の序奏で始まり、独奏ピアノの愛らしい主題が静かに現れ、オーケストラと美しい対話を続ける。独奏ピアノの装飾音符は次第に細かく、音楽は華やかに彩られ、そのまま終楽章に入る。

第3楽章 ロンド：ヴィヴァーチェ、ホ長調 独特のリズムをもつロンド主題が勢いよく現れる。ロンド主題は新しい二つの主題を挟みながら繰り返される。

シベリウス

交響曲 第2番 ニ長調 作品43

作曲：1901年／初演：1902年3月8日、ヘルシンキ／演奏時間：約43分

フィンランドのジャン・シベリウス(1865～1957)は、交響詩〈フィンランディア〉(1900年初演)の成功で国民的作曲家の地位を確立し、フィンランドの伝承叙事詩『カレワラ』を拠りどころに、民衆の思いを代弁するような数々の作品を発表した。交響曲第2番は、後期ロマン派の影響を残しつつ独自の民族色打ち出したシベリウス初期の代表作である。

1901年2月からしばらく、シベリウスは妻と幼い子供たちとともにイタリアの風光明媚な保養地ラパッロに滞在することになった。そこは長い冬に閉ざされたフィンランドとは異なり、春の到来前にもかかわらず美しい花々が咲き、その風景に心は満たされた。そして、イタリアのドン・ファンの伝説などからも着想を得て構想を練り、交響曲第2番の作曲が開始された。

帰国後に完成した第2番は、イタリアでの経験があるとはいえ、全曲を貫いているのは、森と湖の国フィンランドの自然と民族への誇りだ。初演は作曲家自身の指揮で行われ、大成功を収めた。フィンランドの指揮者ロベルト・カヤヌスが、第2楽章の抑制された音楽をロシアの圧政に苦しむ民衆の絶望的な

心情、終楽章の高揚は困難を乗り越えた勝利の象徴と解釈したように、フィンランドの人々もそれぞれの思いをこの交響曲に重ね合わせたことであろう。

第1楽章 アレグレット、ニ長調 ソナタ形式。シベリウスが「圧政にも屈しないフィンランドの田園生活」と表現したように、木管の軽やかな第1主題で始まる。重たく引き延ばされた音に続く第2主題は力強い。

第2楽章 テンポ・アンダンテ、マ・ルバート、ニ短調 ドン・ファン伝説の石像の客の場面やイタリア滞在で触れたキリストに因^{ちな}む様々な楽想が用いられたとされる緩徐^{かんじょ}楽章。

第3楽章 ヴィヴァーチッシモ、変ロ長調 荒々しいスケルツォ楽章。切迫した主部とオーボエが牧歌的な旋律をゆっくりと奏するトリオが交替する。後半の二つの楽章は連結され、その劇的な展開は、闘争から勝利へという図式を思わせる。

第4楽章 フィナーレ、アレグロ・モデラート、ニ長調 ソナタ形式。弦楽器の堂々とした第1主題に勇壮なトランペットが応答して勝利を印象づける。エレジー風の第2主題と共に、大きな高揚を作り上げる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部